本棚ぶらり

プラネタリウムで星の世界を楽しんだところで、昔の天体観測に思いをはせてみましょう。江戸時代の天体観測は、暦をつくることにも使われたようです。この時代の暦の話といえば、数年前話題となった『天地明察』（沖方丁／著　角川書店　2009年）が頭に浮かんだ方も多いのではないでしょうか。江戸時代の実在の人物、渋川春海（読みは「しゅんかい」とも）の生涯を描いた作品です。主人公の清々しく、信念を貫き通す姿が印象的です。

暦といえば、その昔「大宮暦」[注1]というものがあったそうです。『大宮市史　第3巻　中』（大宮市　1978年）によると現在残されていないので、どんな暦かは残念ながらわかっていませんが、大宮の氷川神社で作成された暦だそうです。

旧暦の季節感にも触れてみましょう。『日本の七十二候を楽しむ　旧暦のある暮らし』（白井明大／文・有賀一広／絵　東邦出版　2012年）では、よく知られている二十四節気の各節気をそれぞれ三つにわけた七十二候を紹介しています。「桃始めて笑う」「寒蝉鳴く」「菊花開く」[注2]など季節それぞれのできごとがそのまま名前になっていて、詩的で、季節の移ろいが感じられます。

注1…読みは『広辞苑　第6版』（新村出／編　岩波書店　2008年）による

注2…文中の七十二候表記及び読みについては、紹介本『日本の七十二候を楽しむ』による

大人も楽しめる 絵本の世界 第7回

『じてんしゃにのるひとまねこざる』

H・A・レイ／文・絵　光吉夏弥／訳　岩波書店
大型絵本（1983）、岩波の子どもの本［旧版］（1956）、同［新版］（1998）

今号のテーマからすれば、アメリカが世界初の有人宇宙飛行を目的に推進したマーキュリー計画が原案の『ろけっとこざる』を紹介すべきところ。しかし今回は、同じ「ひとまねこざる」のなかから、それより前に出版された『じてんしゃにのるひとまねこざる』を取り上げよう。

「きいろいぼうしのおじさん」と暮している「おさるのじょーじ」。アフリカから来た3年目の記念日に自転車を貰って大喜び。曲乗りに飽きた「じょーじ」は、新聞配達の手伝いをすることに！でも調子に乗って遊んでいたら大事な自転車が壊れてしまい・・・。

原著は1952年にアメリカで刊行、日本での出版は1956年。当時の右開きの装丁に合わせて改編され、多くの絵が原画と逆向きに加工されていた。版型も小さめに変更、文章も縦書きに変更されている。（今は原書と同じ大きさで左開き、横書きの本になっています）

「じょーじ」がページをめくる方向へぐんぐん進んでいく様は、今も昔も変わらない。＜自転車＞と＜ペット＞という、子どもの憧れが、一杯詰まった一冊といえる。